

梶井基次郎

愛撫



愛^{あい}_い

撫^ぶ

猫の耳というものはまことに可笑おかしなものである。薄べったくて、冷たくて、竹の子の皮のように、表には絨毛じゅうもうが生えていて、裏はピカピカしている。硬かたいような、柔らかいような、なんともいえない一種特別の物質である。私は子供のときから、猫の耳というのと、一度「切符切り」でパチンとやってみたくて堪たまらなかつた。これは残酷な空想だろうか？

否。全く猫の耳の持っている一種不可思議な示唆しさ力に

よるのである。私は、家へ来たある謹厳な客が、膝へあがって来た仔猫の耳を、話をしながら、しきりに抓つかっていた光景を忘れることが出来ない。

このような疑惑は思いの外に執念深いものである。「切符切り」でパチンとやるといふような、兎戯に類した空想も、思い切って行為に移さない限り、われわれのアンニユイのなかに、外観上の年齢を遙はるかにながく生き延びる。とつくに分別のできた大人が、今もなお熱心に——厚紙でサンドウィッチのように挟んだうえから一思いに切ってみたら？——こんなことを考えているのである。

る！　ところが、最近、ふとしたことから、この空想の致命的な誤算が曝露ばくろしてしまった。

元来、猫は兎のように耳で吊り下げられても、そう痛がらない。引張るということに対しては、猫の耳は奇妙な構造を持っている。というのは、一度引張られて破れたような痕跡が、どの猫の耳にもあるのである。その破れた箇所には、また巧妙な補片つぎが当っていて、全くそれは、創造説を信じる人にとっても進化論を信じる人にとっても、不可思議な、滑稽な耳たるを失わない。そしてその補片が、耳を引っ張られるときの緩めゆるになるにちが

いないのである。そんな訳で、耳を引張られることに関してには、猫は至って平気だ。それでは、圧迫に対してはどうかというと、これも指でつまむ位では、いくら強くしても痛がらない。さきほどの客のように抓って見たところで、極く稀まれにしか悲鳴を発しないのである。こんなところから、猫の耳は不死身ののような疑いを受け、ひいては「切符切り」の危険にも曝さらされるのであるが、ある日、私は猫と遊んでいる最中に、とうとうその耳を噛かんでしまったのである。これが私の発見だったのである。噛まれるや否や、その下らない奴は、直ちに悲鳴をあげ

た。私の古い空想はその場で壊れてしまった。猫は耳を
噛まれるのが一番痛いのである。悲鳴は最も微かなとこ
ろからはじまる。だんだん強くするほど、だんだん強く
鳴く。Crescendo のうまく出る——なんだか木管楽器の
ような気がする。

私のながらくの空想は、かくの如くにして消えてしま
った。しかしこういうことにはきりがないと見える。こ
の頃、私はまた別なことを空想しはじめている。

それは、猫の爪をみんな切ってしまうのである。猫は
どうなるだろう？ 恐らく彼は死んでしまうのではなか

ろうか？

いつものように、彼は木登りをしようとする。——出来ない。人の裾を目がけて跳びかかる。——異^{ちが}う。爪を研^とごうとする。——なんにもない。恐らく彼はこんなことを何度もやってみるにちがいない。その度にだんだん今の自分が昔の自分と異うことに気がついてゆく。彼はだんだん自信を失ってゆく。もはや自分がある「高さ」にいるということにさえブルブル慄えずにはいられない。「落下」から常に自分を守ってくれていた爪がもはやないからである。彼はよたよたと歩く別の動物になってし

まう。遂にそれさえしなくなる。絶望！　そして絶え間のない恐怖の夢を見ながら、物を食べる元氣さえ失せて、遂には——死んでしまふ。

爪のない猫！　こんな、便りない、哀れな心持のものがあるうか！　空想を失ってしまった詩人、早発性痴呆ちほうに陥った天才にも似ている！

この空想はいつも私を悲しくする。その全き悲しみのために、この結末の妥当であるかどうかということさえ、私にとっては問題ではなくなってしまう。しかし、果して、爪を抜かれた猫はどうなるのだらう。眼を抜かれて

も、鬚ひげを抜かれても猫は生きているにちがいない。しかし、柔らかい蹠あしのうらの、鞞さやのなかに隠された、鉤かぎのように曲った、ヒ首あいくちのように鋭い爪！これがこの動物の活力であり、智慧ちえであり、精霊であり、一切であることを私は信じて疑わないのである。

ある日私は奇妙な夢を見た。

X——という女の人の私室である。この女の人は平常可愛い猫を飼っていて、私が行くと、抱いていた胸から、いつも其奴そいつを放して寄来よこするのであるが、いつも私はそれに辟易へきえきするのである。抱きあげて見ると、その仔猫には、

いつも微かな香料の匂いがしている。

夢のなかの彼女は、鏡の前で化粧していた。私は新聞かなにかを見ながら、ちらちらその方を眺めていたのであるが、アツと驚きの小さな声をあげた。彼女は、なんと！ 猫の手で顔へ白粉を塗おしろいっているのである。私はゾツとした。しかし、なおよく見ていると、それは一種の化粧道具で、ただそれを猫と同じように使っているんだということがあった。しかしあまりそれが不思議なので、私はうしろから尋ねずにはいられなかった。

「それなんです？ 顔をコスっているもの？」

「これ？」

夫人は微笑とともに振向いた。そしてそれを私の方へ抛ほうって寄来よこした。取りあげて見ると、やはり猫の手なのである。

「一体、これ、どうしたの！」

訊ききながら私は、今日はいつもの仔猫がいないことや、その前足がどうやらその猫のものらしいことを、閃光せんこうのようにに了解した。

「わかっているじゃないの。これはミュルの前足よ」
彼女の答えは平然としていた。そして、この頃外国で

こんなのが流行るといふので、ミユルで作って見たのだといふのである。あなたが作ったのかと、内心私は彼女の残酷さに舌を巻きながら尋ねて見ると、それは大学の医科の小使が作ってくれたといふのである。私は医科の小使といふものが、解剖のあとの死体の首を土に埋めて置いて髑髏どくろを作り、学生と秘密の取引をするといふことを聞いていたので、非常に嫌いやな気になった。何もそんな奴に頼まなくたっていいじゃないか。そして女といふものの、そんなことにかけての、無神経さや残酷さを、今更のように憎み出した。しかしそれが外国で流行って

るということについては、自分もなにかそんなことを、
婦人雑誌か新聞かで読んでいたような気がした。――

猫の手の化粧道具！ 私は猫の前足を引張って来て、
いつも独笑いをしながら、その毛並を撫でてやる。彼が
顔を洗う前足の横側には、毛脚の短い絨氈じゅうたんのような毛
が密生していて、なるほど人間の化粧道具にもなりそう
なのである。しかし私にはそれが何の役に立とう？ 私
はゴロツと仰向きに寝転んで、猫を顔の上へあげて来る。
二本の前足を掴んで来て、柔らかいその蹠あしのうらを、一つ
ずつ私の眼蓋まぶたにあてがう。快い猫の重量。温かいその蹠。

私の疲れた眼球には、しみじみとした、この世のものではない休息が伝わって来る。

仔猫よ！ 後生だから、しばらく踏み外はずさないでいろよ。お前は直ぐ爪を立てるのだから。

——一九三〇年五月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館